

小林秀雄全集

第七卷



歴史と文學

滿洲の印象 島木健作

疑惑 林房雄

事變の新しさ 川端康成

小林秀雄全集
第七卷

歴史と文學

新潮社版

小林秀雄全集第一卷

様々なる意匠



昭和四十二年十一月二十日 發行
昭和五十二年三月十日 八刷

定價 三千圓

著者 小林秀雄

發行者 佐藤亮一

印刷者 塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

寫眞版印刷 半七寫眞印刷工業株式會社

製本所 新宿加藤製本

發行所 株式會社 新潮社

東京都新宿區矢來町七一

電話 東京(266)五二二(業務部)
東京(266)五四二(編集部)

振替東京四八番 郵便番號一六二

(瓶丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。)

歴史と文學

小林秀雄全集第七卷

編
輯

江 中 大
藤 村 岡
光 昇
淳 夫 平

第七卷

目次

社會時評 Ⅱ

滿洲の印象……………	二
クリステイ「奉天三十年」……………	三〇
現代女性……………	三三
疑惑 Ⅰ……………	六
慶州……………	四
事變と文學……………	三三
疑惑 Ⅱ……………	六〇
外交と豫言……………	六九
神風といふ言葉について……………	七〇
大嶽康子「病院船」……………	七三
學者と官僚……………	七
日比野士朗「吳淞クリーク」……………	六七
イデオロギイの問題……………	六

アラン「大戦の思ひ出」	九
清君の貼紙繪	二〇
歐洲大戦	二六
處世家の理論	二八
事變の新しさ	三三
ヒットラーの「我が鬭争」	三三
マキアヴェリについて	三四
文學と自分	四〇
「戦記」隨想	四一
モオロア「フランス敗れたり」	四〇
「歩け、歩け」	四四
沼田多稼藏「日露陸戦新史」	四五
戦争と平和	四六
「ガリア戦記」	四九
ゼークトの「一軍人の思想」について	五三

文學者の提携について……………一七

歴史と文學

エーヴ・キューリー「キューリー夫人傳」……………一八

歴史の活眼……………一九

モオロアの「英國史」について……………二〇

「維新史」……………二一

歴史と文學……………二二

傳統……………二三

傳統について……………二四

作家論 Ⅲ

小川正子「小島の春」……………二五

「假裝人物」について……………二六

鏡花の死其他……………二七

期待する人	二五三
野澤富美子「煉瓦女工」	二五四
島木健作	二五七
林房雄	二六三
川端康成	二七一
林房雄の「西郷隆盛」其他	二七六

感想 Ⅲ

文章について	二八五
感想	二九〇
道徳について	二九三
環境	二九六
オリムピア	三〇〇
自己について	三二三
藝術上の天才について	三二六

感想……………三二

匹夫不可奪志……………三六

パスカルの「パンセ」について……………三三

後記

解説……………大岡昇平……………三五

解題……………吉田熾生……………三二

社會時評

II

満洲の印象

1

黒河に着いたのは、素晴らしい満月の夜であつた。哈爾濱ハルビンから十七八時間も汽車に乗つたらうか、はつきりと覺えない。唯一の備忘録、ポケットの豆手帳に附け忘れた。正直なところ、こんどの旅には確とした目的はなかつた。明け方釜山の港に這入つて行く連絡船の甲板で、同行の林房雄が、おい、卅六になつて始めて朝鮮といふものを見るとはね、と笑ひ乍ら、一種複雑な表情をしてみた。丁度僕も恐らく彼とあまり變らない感情で釜山の山を眺めてゐた。そしてこの感情は旅行中僕につき纏つて離れなかつた。毎日々々生れて始めて見るものばかり見せられて行くうちに、もう何もしまい、子供らしい好奇心の赴くが儘に、時日と體力の許す限り遊び廻る事だけしよう、といふ考へがだんだん形を残して來た。結局その通りになつた。還つて來てぐつたりしてゐる。汽車と聞くだけで胸糞が惡い。

空には一片の雲もなく、月は牙え返つてゐた。雪の曠野を何處までも走る一條の光つた線路があり、それが、氷結したアムール河にぶつかつて、其處にちよびり黒い街がある、そんな考へとも風景とも附かぬものが、やつと汽車から開放されて、月を仰いだ僕の頭を掠めた。踏み固められた驛前の暗

い廣場には、灯をつけた馬車が群がつて、馬は鼻から濛々と白い湯氣を出し、着脹れた屈強な馭者達が、客を争つて喚き立ててゐる。凜烈な夜氣のなかに、鈴が冴えた音で鳴つて、車の下で乾き切つた粉雪がいゝ音で軋る。街までは餘程あるらしい。

黒河まで來ても烏賊の刺身と蛤のお汁を出されたには驚いた。着く街々で宿を取ると必ず怪しげなお刺身とお吸物で恰好をつけたお膳が現れた。内地の田舎を旅行する時に味ふのと同じ閉口を、ペエチカが燃える座敷で味ふのは妙な感じである。汽車の窓から眞つ黒な豚が遊んでゐるのが見える。その艶々した黒い色は、満人の着物のしつかりした藍色もさうだが、赭い土となかなか映りがよい。遠くで遊んでゐるのは烏の群れの様に見える。あのカツレツを食はして欲しいものだと思つたが、この新参旅行者の極めて自然な欲望を充たしてくれた宿屋はなかつた。

風呂に這入つて寢ようとしてゐると、同行の岡田君は防寒具を附けはじめた。お月見に行くと言ふ。宿の裏から河に出る。煉瓦造りの頑丈な家並みと裸の黒い並木とが、静まり返つた雪の道につゞいてゐた。防寒靴の下で雪が喧しく鳴る。廣々とした氷の河面は、月を受けて、鈍い銀色に光り、對岸は黒い夜空で、ブラゴヴェシユチェンスクの灯がキラキラ光つてゐた。筏に組まれた巨材や大きな舟が河岸に凍り付き、氷の上に油らしいものがど強い光をあげて盛んに燃えてゐる。大氣も凍つた様に動かず、白い煙は河面に雲の塊りの様に浮いてゐた。強い印象が僕等を押へ附ける。「飛んだお月見だな、僕は仕方なく言つた。

河に面して、薄汚いロシヤ料理屋が店を開けてゐた。あの二階に上つたら眺めがよからう、と上つて見たが、これは思ひ違ひで、氷の張つた二重硝子の窓は暗いランプの光を映してゐるだけであつた。齒に染みる様な胡瓜の漬物を齧り、ウォッカを呑んでゐると、二人連の勞働者らしいロシヤ人が上つて來た。一人が人の好きさうな笑顔をこちらに向けて、今晚は、と言つて楽し氣な晚餐を始めた。

見るとスープとパンを注文しただけで、ソーセイジやら燻製の魚らしいものやらを、抱へ込んだ包から出してテーブルに並べてゐる。ウォッカも持参である。

僕の學生時代、日本の文學はロシヤ文學の非常な影響の下にあつた。僕の青春時代の文學の夢に一番強く豊富な材料を提供してくれたのは、ロシヤの十九世紀作家達の手に成つた小説の翻譯であつた。そして、ロシヤ語も解らず、ロシヤに行つた事もない僕が、滿洲のロシヤ人達を眺めて不思議な經驗を味つてゐる。例へば、僕は哈爾濱のキタイスカヤ街をぶらぶらして、乞食の顔にも、運轉手の顔にも、キャバレの女の顔にも、ホテルのボーイの顔にも、嘗て心酔したロシヤ小説中の様々な人物の名を読み取つた。さうしようと思つてしたわけではない、さういふ子供らしい聯想を伴はずに眺める事が單に僕には不可能だつたのである。子供らしい聯想と書いたが、實は僕は少しも子供らしい聯想などと思はなかつた。外套を着せてくれる老人に十錢握らせ乍ら、僕は彼の肩を叩く。そして心の裡で呟く。ねえ、おい、俺は君といふ人間を實によく知つてゐるんだよ、チェホフが君そつくりの男を書いてゐるのを、俺は何遍も繰返し讀んだものだ、と。或る人々は、文學者の感傷と言つて笑ふだらうが、この種の感傷を除き去つた世の眞實とは一體何か。而も例へば現在のロシヤの政情に精通した外交官は、ロシヤ文學を耽讀した僕よりもロシヤ人といふものを果して知つてゐるのかどうか、甚だ疑問である。

日本人が支那人といふものを新しく理解しなければならぬ大きな必要に迫られてゐる今日、支那の民族性を新しい表現に盛つた近代文學といふものを、支那がまるで持つてゐなかつた事がどんなに思ひ掛けない障碍となつて現れてゐるかに、僕等は氣附くのだ。アメリカ女の書いた「大地」とやらいふ小説に支那人が書いてゐるとでも言ふのか。アメリカで教育を受けたお蔭で、英語だけが達者になつた支那の論客の論文に、或は日本のマルクス主義文獻を讀み齧つた抗日作家達の作品に、支那人の

正體があるとも言ふのか。僕は信じない。僅かに、魯迅といふ人が、恐らく狭いが深く支那人の肺腑に達したものを、僕等に近しい表現にしてみせて呉れた。だが北京の街頭に阿Qの顔を見附ける事は、哈爾濱の通りでメイシユキンに出會ふより僕には難かしかった。中支の戦の跡で、幾千幾萬の難民の群れを眺め、あの人達が自分に解るだらうかと自問したが、その時、例へば學生時代に教はつた詩經の桑柔編きやうじゆうの様な表現しか思ひ浮ばないのが訝かしかつたのである。

だが、これを裏返して考へると同じ様な事になる。日本人といふものを新しく理解しなければならぬ驚くべき事態となつて、外國人は何によつて現代の日本人といふものを理解してゐるのか。成る程、日本が現在國を擧げて行つてゐる政治的動きの必然性といふものなどは、別に何によらなくても理解するだらう。その代りさういふ外的な冷靜な理解は、理解するのを好まぬ者にはないも同じだ。現に理解したくない國は斷じて理解してゐない。どの様な政治的聲明も無駄であらう。そして、恐らく其處に政治的な相互理解といふものの限界があるのかも知れぬ。

僕は今その種の理解を言ふのではない。人間はもつと内的に相手に共感させ、相手を理解する能力を備へてゐる筈なので、誰も例へば阿Qといふ人物を理解したくはないとは言はないのだ。日本が現在行つてゐる戦争のあるが儘の姿は、外國人はその好む處に従つて理解し、或は理解しない。併し事變に携はる今日の日本人の心といふものについては、凡そ外國人たる限り何等の理解もあるまいと僕は考へる。彼等に用意がなかつた、と言ふのは彼等に用意させる用意が僕等にまるでなかつたといふ事だ。

鎖國は明治維新とともに終つたのではない。今日それは漸く終らうとしてゐる、といふより寧ろ終らせようと僕等は努力しなければならぬのだと言つてよい。明治以來、わが國の文化は西洋文化を輸入して爛熟して來たのだが、これを日本のものとして輸出するほどの完成を見たわけではない。そ